

2006年黒人月間のマンハッタン報告

——「ニューヨークにおける奴隷制度」展示を中心に——

岩 本 裕 子

キーワード：Black History Month, Slavery in New York, Black women

はじめに

1. 2006年初春ブロードウェイ事情

(1) 連日満員御礼「スペリング・ビー」

——“Life is ... PANDEMONIUM.”

(2) オプラ・ウィンfreyの解釈・ミュージカル「カラーパープル」

——“... the pain too is part of the love.”

2. 「ニューヨークにおける奴隷制度」展示

(1) ニューヨーク歴史協会と主催プログラムや展示

——“It Happened in New York” *New York Amsterdam News*

(2) 9つの展示室が語るニューヨークの奴隷制度

——“Black New Amsterdammers” to “Rediscovering Slavery”

(3) 奴隷制度に異議申し立てした黒人女性たち

——Women Who Said “No”

3. ニューヨーク公立図書館分館シヨンバーグ・センター報告

(1) 黒人月間のシヨンバーグ・センター

——“In Motion”: The African-American Migration Experience

——“In Memoriam CORETTA SCOTT KING (1927-2006)”

(2) 最新黒人女性史研究状況

——*Black Women in America*, 2nd ed., 3 vols.

おわりに

註

【『浦和論叢』拙稿一覧】

はじめに

本稿はおそらく、浦和大学短期大学部（浦和短期大学）出版の紀要『浦和論叢』に対する筆者最後の投稿論文となるだろう。1991年着任以来16年目で本稿が22本目の紀要論文となる。本稿の性格上、従来の拙稿に言及する必要が生じるため巻末に【『浦和論叢』拙稿一覧】を付けた。本稿では巻末の番号を用いて拙稿を引用していく。学外の学術雑誌への投稿とは異なり、本紀要は筆者の仕事の「実験」を試みられた貴重な場となってきた。

本来歴史研究者であるべき筆者が、21番を「序篇」と位置づけて2006年3月に立教大学大学院文学研究科から博士（比較文明学）学位を取得できたのも、本紀要を通して、映画を史料としたアメリカ研究を進めることが出来たお陰であった。1、2、3番のような英語論文を発表する場として本紀要を考えていた筆者が、映画誕生100周年の1995年から邦語論文で5番と6番連作を発表して、9番と10番へ発展し、博士学位対象となる三部作出版へと繋げることが出来た。18番と19番は三部作の完結篇『スクリーンに投影されるアメリカ』（以下『投影』と略記）を射程において書かれた。生き物である映画を対象としたために完結篇を出版した後も20番執筆は使命のようにも感じられたものだった。こうした詳細は21番にまとめたため、ここで繰り返すことはしない。

映画に関する拙著を発表する直前に出版した処女作『アメリカ黒人女性の歴史——二〇世紀初頭にみる「ウーマニスト」への軌跡』（明石書店、1997年）の1章として加えたのが浦和短期大学創立10周年記念号に投稿した7番だった。本来の仕事である黒人女性史研究の史料収集をワシントンD.C.とNYで続けた成果は8番、12番（拙著の英文紹介）、14番、15番にまとめ、旅のこぼれ話の13番が残ったことも本稿へつながる、という意味では意義深かった。シンポジウムや学会、研究会などでの口頭発表を活字として残す機会も本誌によって与えられた。4番、11番、17番はその例である。学外の仕事として社会への貢献となる各種社会人講座を続けたことの分析も16番で残す

ことができた。

本学における16年間の研究発表の場として、『浦和論叢』での「実験」は実証されて現実へと着実に動き出したことは幸いだった。図書紀要委員会の諸氏のお陰と心より感謝しつつ、筆者最後の投稿論文には、2006年2月（黒人月間）に駆け足でわずか1週間NY出張をした報告記を投稿したい。記憶も新しい3月末までに脱稿したかったが、年度末及び年度初めの英語コミュニケーション科学科長雑事に追われて叶わなかった。時間をおいて熟成させたために、本学での16年間の仕事を整理する形での論考としてまとめられたことに感謝している。

黒人月間（Black History Month）に関しては、すでに英文論考3番で黒人グラフ雑誌*EBONY*の1976年から1991年までの2月号を史料として検討を試みた。三部作の一つ『スクリーンで旅するアメリカ』では、冬のコラムで紹介もした¹⁾。黒人歴史家カーター・G・ウッドソン博士（Carter G. Woodson, Ph. D.）が1926年に「黒人週間」を企画したことが始まりだった。南部では二級市民として政治経済的にも社会的にも屈辱的な日々を送っていた黒人達に、自分達の文化に誇りを持つとうと提唱したのだった。

最初は2月の1週間だけだったが、50年目の1976年に1ヶ月に延長されて2月は「黒人月間」となった。その英語名にHistoryがあることでも明らかのように、まず自らの人種に誇りを持つためには、黒人の歴史を学び、歴史遺産を確認しつつ賞賛することが必要だった。では、なぜ2月なのか。奴隷解放運動に尽力し、解放後も黒人の権利獲得運動を指導した黒人男性活動家フレデリック・ダグラス（Frederick Douglass）²⁾と奴隷解放宣言の署名者リンカン大統領という黒人史における重要人物2人の誕生日が共に2月だったためである。

2月のNYを訪れたのは1995年以来2度目だった。前回はNY滞在に、日帰りでワシントンD.C.へも出かけた³⁾。黒人人口を多く抱える二大都市における黒人月間の様子は11年前にすでに見ていたが、今回はNYに限定して黒人月間報告を試みたい。日数的には1995年の半分で5泊6日しか滞在でき

ず、まさに駆け足の出張だった。2002年9月に「9月11日」から1年経ったNYを確認することと『投影』出版のための写真を撮ることとを目的としたNY出張から4年目、史料収集では2000年8月以来、実に6年ぶりになる。6年ぶりの成果は3章で報告する。

従来夏休みを利用した出張だったために、史料収集以外で得られる情報は夏期期間のみに限られてきた。今回は非常に貴重な展示の情報を日本の新聞で得ていた⁴⁾。展示期間（Oct. 7, 2005-March 5, 2006: 好評のため期間延長によってMarch 26まで開催された）内での訪問をほぼ諦めていたが、2月出張のお陰で観られたことは大きな収穫だった。ニューヨーク歴史協会（New York Historical Society）主催の「ニューヨークにおける奴隷制度」（Slavery in New York）展示を検討することを、本稿の主旨としたい。

「旅のこぼれ話」の13番では、2000年のブロードウェイ事情を出発点に黒人女優や黒人オペラ歌手を検討した。本稿では、まず2006年のブロードウェイ事情から報告を始めよう。

1. 2006年初春ブロードウェイ事情

（1）連日満員御礼「スプリング・ピー」

——“Life is ... PANDEMONIUM.”

“PANDEMONIUM”という単語は一般的に使われる単語だろうか。“CHAOS”なら日本語でもカオスと称して用いることはあるが、同じ意味で“PANDEMONIUM”を頻繁に使うことは少ないだろう。「大混乱、修羅場、無法地帯」あるいは「伏魔殿」といった意味まで含むこの単語をつづることはさらに難しいだろう。ところが、全米を熱中させ社会現象にもなっている子供達（小学校高学年～中学生）によるつづり字コンテストの出題問題の一つになっている。

ハリウッド映画にはアカデミー賞、TV番組にはエミー賞、音楽界ではグラミー賞、というように、アメリカ社会で評価が定着した数々の賞がある。ブロードウェイ・ミュージカル（演劇も含む）にも同様の賞が存在する。

2006年ですでに60回を迎えたトニー賞である。例年日本でも録画放映されるが、2005年6月5日に開催されたトニー賞授賞式で筆者は「スペリング・ビー」というミュージカルを知った。トニー賞2部門を獲得した正式名称は、「第25回パトナム郡スペリング・ビー」(The 25th Annual Putnam County: SPELLING BEE)である。全国大会への地域予選風景をミュージカル仕立てにしたもので、ミュージカル部門助演男優賞を受賞したダン・フォグラー(Dan Fogler)氏の受賞コメントが大変印象的だったため、2005年度の本学科1年生必須科目「異文化理解」でも教材として見せた。内容に関しては後述する。

コンテストの成立過程は明らかでないが、全米の子供達が英単語のつづり(スペルではなくスペリング)の正確さを競う大会を「スペリング・ビー」と称する。なぜ「蜂」なのかは定かでない⁵⁾。地域の集会を指す米語、あるいは英語の“bene”(祈り、好意)から来ているという説があるらしい。最初にこの言葉が書物で確認されたのは1875年らしく、その大分以前から全米各地で英語のつづり方大会が開催されていたと見られる。全国大会は1925年から始まり、第二次大戦中の1943～45年を除いて毎年開催されている。1994年以来テレビが大会生中継を開始し、2003年にはアカデミー賞候補となったドキュメンタリー映画“Spellbound”(邦題『チャレンジ・キッズ: 未来にかけのこどもたち』)となり、2005年にはブロードウェイに進出するミュージカルになった⁶⁾。同年12月に日本公開されたハリウッド映画“Bee Season”(邦題『綴り字のシーズン』)で日本でも知られるようになったはずである。

2002年秋、いわゆるオフ・ブロードウェイと呼ばれるマンハッタンの小さな劇場で3週間だけの予定で上演された劇が注目され、装いも新たに2005年5月2日にブロードウェイ進出を果たしたのだった。9歳から14歳の参加者は1人ずつ名前を呼ばれてマイクの前に立ち、問題が読み上げられるのを待つのがだった。「スペリング・ビー」では6人の子供達(俳優は皆成人)が、家族や社会とのずれに悩む様子を下地に説明を付けながら、競争の中で自分にとっ

て本当に大切なものを見つけていくという過程を、コメディ風に描いている秀作である。

Circle in the Square Theaterという劇場は劇場街の中心にあるホテルの地下にある。ステージとして一方から見上げるのではなく、四方の客席がステージを見下ろすような作りになっていて、毎回2人⁷⁾の観客が舞台上がって競技に参加する。毎回異なった風景になることは容易に想像がつく。筆者が観た回では、ステージはもちろんのこと観客席の年輩の人達が盛り上がっていたように思う。スペリング・ビーがアメリカ社会で社会現象にもなる要因の一つは、競技者のみならず、会場の観客も参加できる点が上げられるだろう。では、その正式ルール (The Official Spelling Bee Rules) をミュージカル会場で買い求めたプログラムから引用しておこう。

1. 競技者 (a speller) は次の質問をすることができる。単語の発音あるいは定義、文での用例、その単語の由来。
2. もし単語のつづりを言い始めても最初からやり直してもよいが、すでに言い始めた部分の文字を変えることはできない。
3. もしつづりを間違えた場合は審査員がベルを鳴らすので、慰め役 (the Bee's Comfort Counselor) のミッチ・マホニーがエスコートするからステージを下りてほしい。

このルールに従って進むコンテストの様子を一部英文で紹介してみる。

Q : "STRABISMUS"

A : What is the word's definition?

Q : The inability of one eye to obtain binocular vision with the other because of an imbalance of the muscles of the eyeball.

A : Would you please use that in a sentence?

Q : In the schoolyard Billy protested that he wasn't cockeyed.

"I suffer from strabismus," he said, whereupon the bullies beat him harder.

A : "S-T-R-A-B-I-S-M-U-S"

①審判用単語カード（ミュージカルの最中に観客席にばらまかれた）

promulgate • \PRAHM-ul-gayt\ • *verb*

*1 : to make (as a doctrine) known by open
declaration : proclaim

2 a : to make known or public the terms of (a proposed
law) b : to put (a law) into action or force

Example sentence:

In a recent speech, the governor promulgated his plans
to revamp the state's educational system.

こんな具合に進行していくのだが、この回の単語“STRABISMUS”、医学用語の「斜視」という語を日常で常々使う機会は少ないだろう。定義を言われて単語の意味はわかったとしても暗記した単語としてつづれる場合は少ない。むしろ耳から聞いた音から判断してつづっていけば正解する場合は多いはずである。但し発音とつづりの間に著しい例外のある単語（ラテン語語源でbを発音しない単語debt, doubt等）は正しい知識が要求されるが。

2005年度トニー賞授賞式で知って以来、英語コミュニケーション科のコンテストにする準備のつもりでミュージカルを観てきたが、会場でもっとも人気を集めていたのはやはりトニー賞受賞助演男優ダン・フォグラ（Dan Fogler）だった。ブロードウェイ進出1ヶ月後の6月5日の夜、ラジオ・シティ・ミュージック・ホールで開催された第59回トニー賞授賞式において、最優秀助演男優賞を獲得したとき、彼は次のように喜びを表現した。“Be different!”と。字幕では「個性的であれ」と表現されていたが、日米文化比較の上で重要だと思ったために1年生の必修科目「異文化理解」で教材として見せた。他者と異なることこそ欧米社会では評価される。横並びで没個性の日本社会とは違うこと、世界で活躍するには「誰でもない自分」を持つ

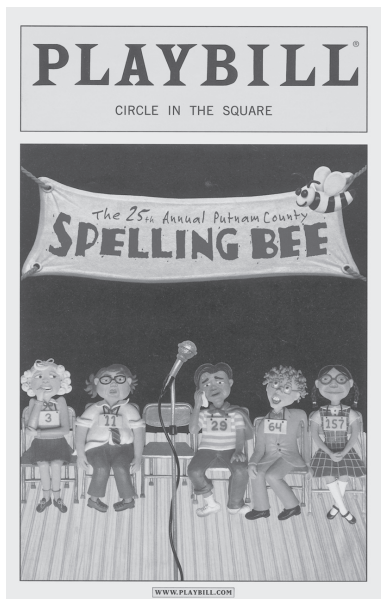
ことが最も大切であることを講義では伝えた。2005年度の1年生には十分伝わったことが幸いだった。

フォグラー演じるウィリアム少年(William Barfee)は、つづりが即座にわからないときには右足を使って床につづる、という奇妙なダンスをしながら正解をひねり出すことが特徴的で耳目を集めた。トニー賞受賞直後の記者会見で「実際の全国大会で参加者が答えるときの癖や独特のつづり方を見て、知識をひけらかす方法として足を使うことを思いついた」⁸⁾と語ったという。

アメリカ社会における平等な機会ということで言えば、スペリング・ビーは、人種、民族、階級を越えて、子供達に等しく学習の機会を提供し、成果も一個人の努力と裁量の結果となる。ただミュージカルでも描かれているが、結果追求と言うよりその過程における子供達と家族の関係が重要になっている。こうした社会現象に乗ったためか、ハリウッド映画でもスペリング・ビーを題材として家族の関係を描いたものが登場したことはすでに言及した。

『綴り字のシーズン』では、自分のなせなかったことを娘に託そうとする「お受験パパ」をリチャード・ギアが演じた。コンテストに出場する子供達の数だけ家族の物語があることを教えてくれる映画だった。もう一作、原題“Akeelah and the Bee”もスペリング・ビーに挑戦する黒人少女アキーラとその父親を描いた映画である。全米では公開され注目を集めたが、現時点では日本未公開である。

②劇場で配布される小冊子



(2) オプラ・ウィンfreyの解釈・ミュージカル「カラーパープル」

——“... the pain too is part of the love.”

黒人社会内部の女性差別を暴露する内容であるとして、黒人社会では1982年発表当初から批判の対象となったアリス・ウォーカー (Alice Walker) の小説『カラーパープル』(*The Color Purple*) は、1982年のピューリッツァー賞を受賞した。1985年にはスピルバーグ監督によってハリウッド映画化された。映画『カラーパープル』に関しては、筆者はすでに拙著『スクリーンに見る黒人女性』において1章設けて検討を試みている⁹⁾。

第58回アカデミー賞で主演、助演女優賞を含む11部門で候補となり耳目を集めた。結果は『愛と哀しみの果て』(*Out of Africa*) に惨敗で、最優秀賞を1つも獲得することはできなかった。それまで無冠だったスピルバーグは1つでも賞をほしかったようだが、原作者ウォーカーはアカデミーの決定に対して無頓着だったと語る。ただ『愛と哀しみの果て』は反動的で人種差別的な作品で、アフリカへの入植者である白人を救済者のように描いたアフリカ侵略映画だと酷評した¹⁰⁾。

『カラーパープル』では、義父からの性暴力、夫ミスターからの肉体的、精神的DV (Domestic Violence) に耐える主人公セリーに対して、義理の息子の妻ソフィアや夫の元恋人シャグが「学習」の機会を与えようとした。愛のない屈辱と忍従の生活でセリーを支えたのは、生き別れた妹ネッティへの姉妹愛だったが、加えて、夫の元恋人シャグとの間に芽生えた愛情にもつながる友情がセリーに現実を学習させていった。

セリーに学習の機会を与えようとしたソフィアは、人に押さえつけられることを極端に嫌う女性として描かれた。男の暴力に立ち向かい、夫ばかりか白人市長を殴り倒して刑務所に入り、家庭への夢も子供達への愛も断ち切れ、自分の信念が揺らいでいくことにもなった。最後には再生するが。

このソフィア役がハリウッド映画デビューとなったのは、オプラ・ウィンfrey (Oprah Winfrey) だった。ハーポ・プロダクションを所有し、ノーベル賞作家トニ・モリソン (Toni Morrison) の受賞作『ピラヴド』を映画制作、

主演もした黒人女性である¹¹⁾。最新情報では2004年度年収247億円で全米長者番付芸能界第1位だと報告されている。このオプラがスポンサーとなった作品がブロードウェイ・ミュージカル『カラーパープル』(OPRAH WINFREY PRESENTS, The Color Purple: A New Musical) だった¹²⁾。

N Y、ブロードウェイのブロードウェイ劇場 (Broadway Theater) でミュージカル化され、2005年12月1日に初日を迎えて以来、大変な人気を博して連日満員御礼の盛況ぶりである。筆者は2006年2月17日N Y到着の夜に観る機会を得た。すでに言及したように、拙著において映画そのものの検討を終えた筆者にとっては、このミュージカルを観ることはN Y到着と同時にしなければならない「仕事」でもあった。従来ミュージカルを観てきたときのように劇場へ向かう足取りは決して軽やかではなく、心躍るものでもなかった。正直、心の重い「仕事」だった。

ブロードウェイ劇場は劇場街 (theater district) のもっとも北より53丁目に位置し、私事ながら1989年に初めてN Yを訪れ、最初に見た『レ・ミゼラブル』(Les Miserables) の上演劇場でもあった。以来17年間、N Y出張時は、本稿第3章で報告するハーレムのニューヨーク公立図書館分館シヨンバーグ・センターで日中史料を収集し、夜は宿泊数分だけミュージカルを観ることを常としてきた。

18年間のロングランを続けた『キャッツ』(Cats) がいよいよ閉幕することになった2000年には、開幕以来一度も休まずボンバルリーナの役で『キャッツ』の舞台に立ち続けた黒人女優に刺激されて、本誌にも13番を執筆したことはすでに言及した。拙著『投影』の「マンハッタン歴史散歩」¹³⁾でも2002年9月出張時の報告を残した。N Y出張の図書館以外の成果も筆者には大きいと言える。

入場が始まった時間にブロードウェイ劇場に着いた筆者は、いつも通り「舞台に一番近い席」を指定したが、窓口の男性が「111ドル25セントだがいいか」と確かめてきた。訪れるごとに値上がりしているとは言え、「9月11日」から1年経ったN Yを確認するために訪れた2002年9月に2回目だったエルトン・

ジョンの『アイダ』のオーケストラ席が80ドルのままだったことを思うと、確かに高い……。当日チケットを格安で販売することで有名なTKSで半額チケットの対象にならない人気のミュージカルは90ドル前後が相場というのが2006年2月の状況だったと思う。高額チケットにもかかわらず、会場は立ち見（standing room）こそなさそうだがほぼ満席で、観客の方が興奮しているようだった。

滞在中のTVで後に知ることになったが、黒人月間でもあり、多くの黒人紹介CMが流れていた。なかでもミュージカル『カラーパープル』のCMは何度も目にした。翌18日の朝、地下鉄に乗るために劇場の前を通ったとき、すでにチケット購入のために長蛇の列ができていたのは驚きだった。この写真（下）はその時に写したものである。

③劇場の写真



本題に入ろう。写真に「オブラ・ウィンフレイ提供」の文字が読めると思うが、映画『カラーパープル』でのソフィア役がハリウッド・デビューとなったオブラが主要な資金提供者である。劇場で配布される小冊子（次頁写真）とは別に、有料のプログラムによれば他に10人以上（クインシー・ジョーン

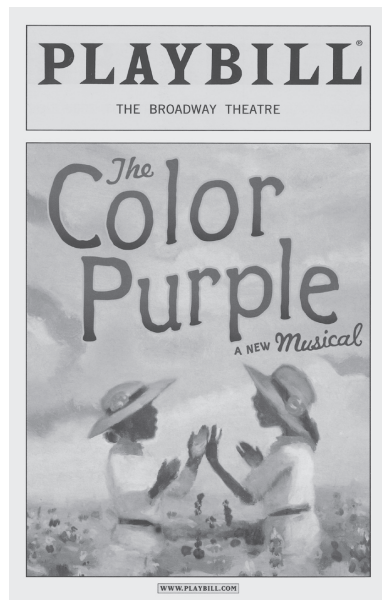
ズを含む)の援助者と数社の資金提供があったようである。

冊子冒頭でオブラは「夢が叶った」と題された挨拶文を寄せている。20年以上前に出版された原作から「勇氣、償い、愛、希望」を学び、多くの人々に紹介していたが、映画化されたときにソフィア役ができたことは人生におけるもっとも偉大な経験だったと語っている。あれからさらに20年経った現在、ブロードウェイ・ミュージカルとして提供できることを誇りに思うとも語る。さらに、ミュージカルを楽しむと同時に啓発され、観客の人生に大きな力を与えてくれるだろう、と結んでいる。

「原作及び映画に基づく」と但し書きがあるように、登場人物の衣装や舞台設定はほとんど映画のままになっている。セリーと妹ネッティが手を合わせながら「マキダダ」を歌う場面で始まり、感動のラストには子供の頃の二人が舞台の袖でやはり「マキダダ」を歌って幕が下りた。ミュージカルなので当然のことながら、全編にパワフルな黒人音楽が歌われ、言語を理解できない外国人観客はそれだけでも十分満足している様子だったことが気になった。オブラが意図した「啓発」が生きてくるのは幕間を経た後半部分だったかもしれない。

義父からの性暴力やミスターからの肉体的、精神的DVも十分せりふや歌に表現されていて、黒人音楽がパワフルであればあるほど筆者は複雑な思いに駆られ音楽を楽しむことはできなかった。原作及び映画と比較して異なる部分が3カ所あったと思う。まず原作にない部分をスピルバーグ監督が追加したとして黒人女性作家達から猛攻撃を受けた、シャグと牧師の父親との和解が表現された教会の場面はミュ-

④劇場で配布される小冊子



ジカルにはなかった。逆に映画では暗喩的ではなかったセリーとシャグの同性愛関係は、はっきり表現されていた。幕間になって、隣に座ったネブラスカ州から来たという白人老夫妻と話したが、このことに大変驚いた様子だった。映画は見たが原作は読んでいないようだった。この2カ所の相違点は、映画よりミュージカルの方が原作に「忠実」であったと思う。

3カ所目はラスト・シーンで、ミスターとセリーの復縁はあり得ないという映画の解釈とミュージカルの解釈は微妙に違っていた。復縁こそしないが、友情に変わっているらしくアフリカから子供達2人を連れてネッティが帰ってくる場面ではミスターも仲間入りしていたのだった。オプラの言う「償い」なのかもしれないが、筆者には納得できなかった。

プログラムには1909～1949年の黒人史年表もあり、音楽や映画、ミュージカルなど芸能面での黒人の活躍ばかりか、全国黒人地位向上協会創設、ベルリン・オリンピックでのジェシー・オーエンスの偉業、第2次世界大戦中のタスキギー航空隊の活躍などが紹介されている。

プログラムには原作者アリス・ウォーカーの言葉も紹介されている。註でも言及したように、映画化は相当なショックだったようで、ミュージカル化されるという話が来たときにも特に嬉しくはなかったと語っている。ただ、できあがったミュージカルには満足したようで、原作を書いたときと同様に「先祖の声が聞こえるようだ」と評している。音楽の場面でもジュークボックス酒場でのダンスシーンがお気に入りの様子だった。ウォーカーが原作を通して伝えたかったことは「大きな愛、怒りや憎しみをも包み込むような大らかな愛、人に何かを与えようとするときには痛みを伴うこともあるが、痛みもまた愛である」と結んでいる。

2. 「ニューヨークにおける奴隷制度」展示

(1) ニューヨーク歴史協会と主催プログラムや展示

——“It Happened in New York” *New York Amsterdam News*

ニューヨーク歴史協会は1804年に創設された教育機関で、世界レベルの

博物館としての財産を有し、重要な研究書籍を有する図書館でもある。4世紀に渡る米国の遺産を6万点も所蔵している。ニューヨークでは最古の文化機関として存在し、セントラルパークの西側、ブロードウェイとアムステルダム通りの間で77丁目に位置している。

絵画などの美術品の常設展示に加えて、今回の展示のような特別展示を続けている。2月に入手した2006年冬／春号の展示リストで確認すると、黒人月間と重なるためか、圧倒的に黒人関連のプログラムが満載されている。博物館の入場料（大人\$10、シニア及び生徒とその引率者\$5、大人に連れられた12歳以下の子供無料）さえ払えば自由に聞くことのできる講演も多く準備されていた。黒人月間にふさわしい講演としては、逃亡奴隷として南部の奴隷達を逃亡させるために活躍したハリエット・タブマン（Harriet Tubman）¹⁴⁾に関する講演「ハリエットの帰還」（Harriet Returns）があった。また2月の祝日「大統領の日」週末を控えた金曜日に「大統領は生きている」（Presidents Alive!）など、“Family Programs”らしい子供達への啓蒙を目的とした内容になっていた。

さらに有料ながら、次のような各種講演を聴くことができる。「合衆国憲法と自由」「アメリカ民主主義の繁栄：ジェファソンからリンカンまで」「最高裁と人種平等闘争」といったアカデミックで、まさに歴史に関連した成人向けの講演が企画されていた。

屋外でのプログラムとして、マンハッタン内の歴史散歩も企画されている。命名由来は紹介されていないが“Big Onion Walking Tours”と称されて、参加費\$15で2時間ほどのガイド付き散策が楽しめるようである。その例として、3月には「移民のニューヨーク」「セント・パトリック・デー週末のアイランド系ニューヨーク」4月に「アッパー・ウェストサイド」「ギャング・オブ・ニューヨーク」5月に「金融街」「歴史的なハーレム」という内容である。

講演会だけに留まらず、映画会や音楽コンサートも数多く企画されていた。サイレント映画道化役者の代表、バスター・キートン（Buster Keaton）に捧げた連続映画上映会や、様々なジャンルの音楽の夕べも企画されていた。

モーツァルト関連のように人種に関係ない企画もあれば、黒人霊歌を世界に周知させたことで有名な黒人大学フィスク大学の聖歌隊が産み出したフィスク・ジュビリー・シンガーズ (The Fisk Jubilee Singers)¹⁵⁾ のコンサートも開催された。

以上のような様々な展示やプログラムを歴史の視点から実施しているニューヨーク歴史協会が、多文化主義やポスト・コロニアリズムといった知の潮流の洗礼を受け入れつつ開催したと考えられる「ニューヨークにおける奴隷制度」を次に検討していきたい。

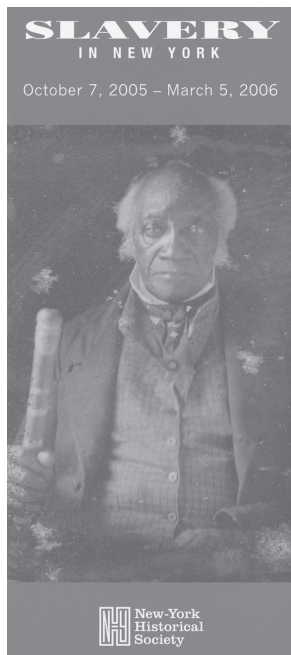
(2) 9つの展示室が語るニューヨークの奴隷制度

——“Black New Amsterdammers” to “Rediscovering Slavery”

会場は、歴史協会建物の一階部分の大ホールと売店以外のすべてのスペースを9つに区切って展示場としていた。各々の部屋についたタイトルをまず列挙することに ⑤展示会場で配布されたチラシによって展示の流れを追ってみたい¹⁶⁾。

1. 大西洋奴隷貿易とNY市
2. ニューアムステルダムの黒人達
3. 英領植民地NYでの奴隷制度の厳しい万力
4. 独立戦争と黒人改革闘争
5. 自由黒人ニューヨーカーの状態確立
6. NYの公的な場での自由黒人
7. 限定付きに過ぎない自由
8. 歓喜の日(1827年NY州での奴隷制度廃止)
9. NYの奴隷制度の記憶と再発見

以上の小見出しで容易に類推できるように、17世紀の大西洋上で行われた奴隷貿易から始



まるN Yにおける奴隷制度は、ニューアムステルダムの名称で明らかなようにオランダ植民地を経て英領植民地となり、独立戦争後N Y州となってからも存続していた。一部の自由黒人の存在はあったが、その場合は制限付きの自由に過ぎず、1827年7月4～5日のN Y州奴隷制度廃止という「歓喜の日」(The Day of Jubilation)を迎えるまでは制度として生きていたのだった。

この展示を筆者が最初に知った『朝日新聞』の記事では「ニューヨークが…多くの奴隷を抱え、奴隷によって築かれた市だったことは、米国内でもほとんど知られていない」と書き出していた¹⁷⁾。米国史では、植民地時代以来19世紀初めまで北部で奴隷制度が存続していたことは、いわゆる「周知の事実」なのだが、同記事を引用すれば「自由の象徴のように言われるニューヨーク」とその現実とは結びつかないのかもしれない。

現在のマンハッタンに最初に住んだアフリカ黒人は、1613年にオランダ船によって運ばれたジャン・ロドリゲス (Jan Rodrigues) だとされる。米国史におけるアフリカ黒人の「初めて」は、1619年に北米英領植民地ヴァージニアのジェームズタウン植民地にやはりオランダ船で運ばれた20人であることは明らかな事実である。その6年前にすでに後の英領ニューヨーク植民地に黒人が住み始めていたと言うことになる。

アムステルダム砦と呼ばれた現在のバッテリー・パーク、いずれブロードウェイと呼ばれることになる大通り、ウォール街の由来となった防壁、トリニティ教会、最初のN Yシティホールとなったフロレンセス・タバーンなど、すべては黒人奴隷達が建設したものだった。奴隷労働なくしてニューアムステルダム植民地は誕生しなかったことは確かである。オランダの西インド会社が導入した奴隷制度が英領植民地となってからも存続したばかりか、以後、奴隷の権利を狭める法律や制度が確立された。土地所有や相続、4人以上の集会禁止、移動制限などが決められた。

独立戦争前の13植民地でN Yは、サウス・カロライナのチャールストンの次にもっとも多く奴隷を抱える都市の一つだった。北部都市における奴隷人口を見た場合、ボストンで2%、フィラデルフィアで6%だったのと比較

してNYでは20%が奴隷であった。1700年代にはNYの一般家庭の41%が家内奴隷を所有していたとされる。半数に満たなかったという解釈も成り立つだろうが、現実にはNYの一般家庭は奴隷貿易経済に頼る暮らしをしていたことは事実である。貿易によって入手できるチーズ、タバコ、衣服、ラム酒、砂糖、バターといった商品を必要としていたのだった。NY州での奴隷制度が廃止された1827年以降でも、NYは海洋貿易都市として栄えるために大西洋上の奴隷貿易の拠点の一つであり続けた¹⁸⁾。

そもそもこの展示の直接のきっかけは、1991年にマンハッタンの建築現場で非常に古い墓地が発掘されたことだった。そこは黒人専用墓地であることが判明し、黒人奴隷や自由黒人の骨が419体見つかり、おそらく全部で2万件の墓地が存在しただろうと推定された。高層建築建設のために地中深く掘削した結果、墓地が見つかり、考古学者による検証が進んだのだった。黒人考古学者のマイケル・ブレイキー（Michael Blakey）博士を中心に、発掘チームのほとんどが黒人だということである。墓地はおよそ200年前のもので、遺体の骨や歯が確認されたり、棺桶の一部が残っていたりするが、墓石はないために氏名、年齢などの身元確認は出来ないらしい。

身元不明の遺体ながら、着衣の5個のボタンに錨の模様があるために英国海軍に所属したのだろう（独立戦争中は英国側につく黒人奴隷がいた）とか、遺体の寝かされ方や歯形に残る風習などから西アフリカ（現在のベナン共和国あたり）生まれで奴隷として運ばれてきたのだろう、といった様々な歴史事実を類推することが出来たようである。NYで最初の黒人墓地は1650年頃に造られ、それは初めて黒人がニューアムステルダムに運ばれてから約25年後のこととされた¹⁹⁾。

NYは奴隷制度廃止運動の発祥地で、この街から奴隷制度を一掃するために多くの活動家を産み出したことも事実である。そのために「ほぼ300年間、奴隷制度はNY市の生活にくまなく行き渡り続けた」²⁰⁾ 事実、1827年にNYで奴隷制度が廃止されたために、長く触れられないままに人々が忘れかけていた事実なのかもしれない。今回の展示を通して改めて「奴隷制度はアメ

リカ史における二次的な問題ではなく、重要事項である」²¹⁾ ことが入場者によって再確認されたことは間違いないだろう。

(3) 奴隷制度に異議申し立てした黒人女性たち

——Women Who Said “No”

展示会場で配布されたチラシ(59頁)に用いられた写真は、この墓地発掘の結果を発表した書籍*Slavery in New York*²²⁾の表紙である。撮影者不明ながら「奴隷シーザー」(Caesar, A Slave)と題され1851年に撮影された銀板写真でニューヨーク歴史協会が所蔵している。各展示室では、歴史事実の紹介に加えて、記録が残る奴隷達の個人記録を紹介していた。写真のシーザーを始めとしてオランダ植民地時代の奴隷でオランダ語の「大きい」を意味する名前の付いたグルット(Groot Manuel de Gerrit)、ニューヨーク植民地での最初の奴隷で、後に自分の経験を本に書き残したボストン・キング(Boston King)などの男性奴隷とともに女性奴隷の展示もある。

展示で紹介された3人の奴隷女性を確認しておきたい。まずドロシー・クレオール(Dorothy Creole)はニューアムステルダムに最初に連れてこられた黒人女性の一人だった。その苗字クレオールが示すように、彼女はニューアムステルダムに着くまでに母国アフリカの言葉ばかりか、スペイン語かポルトガル語を話したという。植民地でのアフリカ人女性の役割は、同じアフリカ人男性の妻としての役割と、オランダ人女性のために家事をすることだった。

ドロシーはアフリカ人男性パウロ・アンゴラ(Paulo Angola: この姓は奴隷が持つ姓の中でも最も一般的だった)と結婚して、息子アントニオを産んだ。オランダ西インド会社の財産としてのアンゴラ家族だったが、ドロシーとパウロは年季が明けて自由を獲得したが、息子は依然と奴隷のままであった。歴史家はこの状態を「半自由」('half-freedom')と表現した。

ドロシーとパウロは元奴隷主からニューアムステルダムの北方に土地をもらい、自作農となった。その土地には元奴隷達が住み着き、黒人コミュニ

ティを形成していた。ドロシーとパウロのような存在は奴隷達にとって希望の星となり、年季が明けて自由の身になれることを待てるようになったという。英領植民地の南部の状況に比べると、オランダ植民地にはアフリカ人達に希望が持てる状態であったことは確かなようである²³⁾。

2人目は、1817年夏にN Y港に着いた奴隷船に乗せられていた8歳のメアリ (8-year-old Mary) だった。数日前まではN Yから70マイル北にある町で奴隷として暮らしていたが、N Y経由で南部に売られていく途中だった。当時違法であった奴隷売買が摘発され、裁判にかかり、メアリは九死に一生を得て、生まれた町に戻ることが出来た。戻ることによって「年奉公人」(indentured servant) として21歳になれば自由黒人になることが保証されていた。もし南部に売られた場合は、メアリは奴隷のままで生涯を送ることになったのだらう²⁴⁾。

メアリが生まれた町へ戻る直前、しばらくの間、キャサリン・ファーガソン (Catherine Ferguson) の家で過ごした。ファーガソンとは独立戦争の頃に生まれた女性だった。母と共にウォール街近くに住む奴隷主のもとで暮らしていたが、母親が売られて離されたという辛い経験を少女時代にしていた。この経験からファーガソンは一生懸命に働き、後に小さくて貧しい子供達を援助するようになったのである。14歳の時に洗礼を受けキリスト教徒となり、ほぼ同じ頃に白人女性によって\$200で自由を買ってもらった。彼女が焼くケーキの美味しさが評判となって、ケーキ作りで生計を立てるようになるのだった。一度結婚して2人の子供を持ったが、夫も子供達も亡くなってしまい、その後生涯の大半を一人で過ごしたのだった。

ファーガソンはマンハッタンで最初の日曜学校を始めたことで有名で、学校では貧しい子供達にキリスト教を伝え、お腹一杯美味しいものを食べさせたのだった。生涯で合計48人の子供達の面倒を見たと言われるが、その内20人は白人の子供であった。人種を越えた慈悲を施したことで、ファーガソンは高い評価を受け、1854年にコレラで亡くなったときには、著名な白人ビジネスマンで奴隷制反対論者である男性から「追悼文」を寄せられたほどだっ

た。彼はファーガソンを「聖者」と讃え「ケーキ作りの名人だった敬虔なキリスト教徒だった。生涯をかけて救済の必要な子供達を教育した」と彼女の人生を絶賛したのだった²⁵⁾。

この展示を通してファーガソンの存在を知った筆者は、展示見学を終えてから向かったハーレムのシヨンバーグ・センターでの史料収集のテーマの一つにファーガソンを加えることが出来た。彼女に関する史料はわずか2点で、1つは肖像画が残っていた。肖像画の説明には「元奴隷、宗教者、1790年代にN Y市で最初の日曜学校を開いた黒人女性教育者」とあり、1927年出版とのことだった。もう1点は貴重本として保存されている*Eminent Americans*に記載されているとのことだった。筆者が訪れた火曜日は貴重本保存資料館は閉館されていたため、原本閲覧は諦めなければならなかったが、幸いマイクロフィルムで読むことが出来た²⁶⁾。

アメリカ史を形成した著名なアメリカ人の伝記だが、1856年出版時点で対象となったのは330人の男女だった。その内黒人は4人で女性は2人である。その一人がファーガソンということになる。もう一人の黒人女性はフィリス・ホイートリー (Phyllis Wheatley) である。1760年に8歳でアフリカから運ばれて、1773年には国内外で注目された詩集を出版した詩人だった。黒人男性2人は、ロット・ケアリー (Lott Cary) とベンジャミン・バネッカー (Benjamin Banneker) だった。前者はヴァージニア州リッチモンドでタバコ工場の監督に出世して、蓄えた金で自分と家族の自由購入を達成した有能者である。自由人となってからはバプティスト派の宣教師としてリベリアに渡った。後者は、数学者、天文学者、年鑑の出版者で、その学識のためにワシントン大統領によって首都の調査・設計委員会の委員に任命された人物である²⁷⁾。

展示で紹介された黒人女性奴隷は以上の3人だったが、こうした奴隷制度に異議申し立てをした黒人女性たちに関する講演会が企画されたことを本章の最後に紹介しておきたい。月に1度連続3回開催されたので、開催順に列挙しておく。

1. “Harriet Jacobs: A Life” (Wed., Oct. 26, 2005)

ハリエット・ジェイコブズは1813年に奴隷州のサウス・カロライナ州で生まれた奴隷で、彼女の数奇な人生は彼女自身による自伝で明らかになった。*Incident in the Life of a Slave Girl Written by Herself*²⁸⁾と題された自伝的小説という方法で1861年に出版された。奴隷解放を信じて白人の愛人となったハリエットが、苦難の末に精神的にたくましく成長していく過程が全編に描かれた自伝である。講演は、このハリエットの伝記を編集したイエリン (Jean Fagan Yellin) が執筆した *Harriet Jacobs: A Life* が2004年度のフレデリック・ダグラス図書賞を受賞したことを記念して著者自らが行う。

2. “Sojourner Truth: A Life, A Legend” (Wed., Nov. 9, 2005)

奴隷制時代を代表する黒人女性といえば、2-(1)で言及したハリエット・タブマンと並ぶほどに有名な活動家がソジャーナー・トルースである。彼女が南北戦争の前後を通して各種講演で語った言葉の数々は、多くの女性たちを勇気づけるものだった。彼女の人生とその遺産に関する講演をペインター教授 (Nell Irvin Painter) が行う。

3. “Our sisters Crushed and Abused: Gender and Religion in the Anti-slavery Movement” (Tues., Dec. 13, 2005)

南北戦争以前の奴隷制反対運動において、女性たちは組織的に活動し、積極的に効果的な講演も繰り返されていた。そうした黒人女性活動家達に関する講演を、ホートン教授 (Lois Horton) が行う。

これらの講演のテーマで明らかのように、奴隷制度に対してははっきりと反対の立場を表明していた多くの黒人女性たちが存在したことも、今回の展示を通してより明らかにされたと思われる。「ニューヨークにおける奴隷制度」展示において、ジェンダーの視点が強調されたことをここに明記しておきたいと思う。

3. ニューヨーク公立図書館分館シヨンバーグ・センター報告

(1) 黒人月間のシヨンバーグ・センター

——“In Motion” : The African-American Migration Experience

——“In Memoriam CORETTA SCOTT KING (1927-2006)”

シヨンバーグ・センターは史料所蔵の貴重な図書館であると同時に、黒人文化の発信地でもある。館内では常に黒人文化に関する何らかの展示が行われてきた。前回2002年9月に短時間訪れた折には、友人の司書ベティ（Betty Odabashian）からN Y市からの経済的締め付けが厳しくなり、閲覧室の開館日数が減ってきたことなど聞くに留まった。今回2006年2月の訪問では、建物そのものが改装中で従来の出入り口ではなく隣のビルから出入りし、地下にある仮閲覧室は従来の4分の1程度の広さのため、閲覧者でごった返していた。

⑥IN MEMORIAM CORETTA SCOTT KING 1927-2006

仮玄関を入って左側にある展示室の入り口には右のような立て看板が立っていた。2006年1月に亡くなったキング牧師未亡人、コレッタ・スコット・キングを偲んだ写真だった。彼女の死を悼む記事は*The New York Christian Times*にも掲載されて、彼女は「公民権運動のファースト・レディ」（First Lady of the Civil Rights Movement）とたとえられていた²⁹⁾。



展示室では従来歴史にまつわる展示がなされてきていた。2005年夏にはマルコムXに関する展示が行われたが、筆者が訪れた2006年2月には次頁の写真にあるように、アフリカ系アメリカ人すなわちアメリカ黒人となるアフ

リカ人20人が1619年にジェームズタウン植民地に運び込まれてからの歴史が展示によって紹介されていた。黒人月間と言うこともあって、会場には多くの子供達が訪れていた。奴隷船で運ばれた時の手かせ、足かせなども陳列されていて、その歴史を視覚に訴えていた。

キング牧師未亡人に追悼記事を出した前掲紙にはニューヨーク歴史協会の展示に関する紹介記事も出ていて半年に渡る展示ながら、2月は特に黒人月間としてその展示の意義が強調され「黒人月間は展示鑑賞には最適な時間」³⁰⁾と書き出されていた。2月号だけあって、随所に黒人月間の宣伝を見ることができた。マンハッタン34丁目にある「世界最大の百貨店」が売り物のメーシーズ百貨店(Macy's)での「ニューヨークの奴隷制度」の分家展示広告には黒人月間であることも掲載されている³¹⁾。

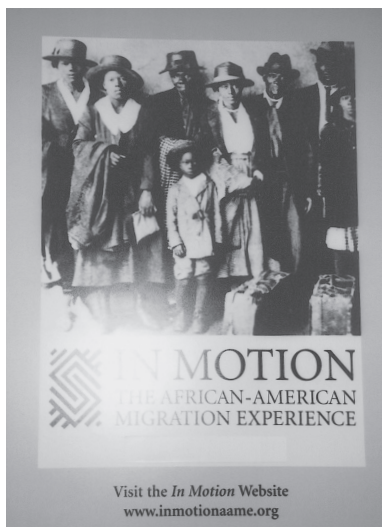
話をションバーグ・センターの展示に戻そう。奴隷制時代の奴隷売買の書類や逃亡奴隷手配ポスターなど貴重な史料が陳列されていた。黒人月間に関しては、すでに「はじめに」で説明したので繰り返すことは避ける。

(2) 最新黒人女性史研究状況

——*Black Women in America*, 2nd ed., 3 vols.

NY出張の成果の一つとしてのションバーグ・センターでの史料収集は、本来ならば論文の形で明らかにするべきところだが、本稿ではその端緒となる史料収集状況をわずかにまとめておきたいと思う。「はじめに」ですすでに触れたように『浦和論叢』拙稿14番と15番でまとめたような史料の覚え書

⑦IN MOTION THE AFRICAN-AMERICAN MIGRATION EXPERIENCE



きも、あのままでとどまり、博士學位論文対象の拙著執筆に迫られるだけで、史料収集の成果は紹介文程度の仕事しかできないままである。

1994年夏の「アメリカ黒人女性史研究の現状」という学会発表は、拙稿4番となった。本学に勤務した最初の3年間訪米研究が叶わなかったため、コンピュータ検索の結果を整理したこの発表を下地に、終戦50周年の1995年2月と8月、1996年8月、通算3回の渡米によって、1996年当時の最新動向にまで高めることが出来た。1997年が初版で2000年に重版された拙著『アメリカ黒人女性の歴史——二〇世紀初頭にみる「ウーマニスト」への軌跡』の巻末には、アメリカ黒人女性史研究動向として参考文献リストを12頁分つけた。同著が重版される段階で、1999年8月に渡米して初版以降3年分の研究動向を追加したのだった。

ただ、これらの作業はあくまで研究史の整理に過ぎない。拙稿14番と15番にしても2001年までである。これら筆者が行った仕事からすでに5年が経ち、2006年2月、今回の訪米で確認した合衆国の最前線研究状況は、日本におけるアメリカ黒人女性史研究のように足踏み状態ではなくめざましい状況だった。2000年の「重版によせて」でも言及したように³²⁾ 合衆国を代表する黒人女性史家ダーレン・クラーク・ハイン (Darlene Clark Hine) の精力的な仕事ぶりには渡米のたびに驚かされてきたが、今回も同様だった。

前掲拙著の参考文献でも1頁分の紹介となった『合衆国史の中の黒人女性』シリーズ全16巻 (*Black Women in United States History*, 16 vols., 1990) の編者であるハインは、3年後の1993年には2巻本の百科事典 *Black Women in America: an historical encyclopedia* を、さらにその対象を音楽 (クラシックからヒップホップまで) や演劇などに大幅に拡大した全10巻の百科事典 *Facts on File Encyclopedia of Black Women in America* を1997年に、と筆者が訪米するたびに次々充実した仕事を見せてくれた。

今回もハインは筆者を驚かせた。Darlene Clark Hine, ed., *Black Women in America*, 2nd ed., 3 vols. という、1993年出版の百科事典をさらに充実させた増補版を出版していた。2巻本に1巻増やし、まさに1.5倍の百科事典と

なっていた。シヨンバーグ・センターに着くやいなや、旧交を温める間もなく司書ベティが筆者の座る机に載せてくれたのが館内閲覧限定のこの3巻本だった。いつもながら即座に購入を決めていたので、この3巻本に限定しない史料収集に努めたが、この3巻を机上に積み上げた重みは筆者にアメリカ黒人女性史研究に戻る決意をさせるのに十分なものだった³³⁾。

次の目標となる「アメリカ黒人女性史を新書として出版する」という某出版社との仮約束を現実のものとしなければならないという責務を痛感しつつ最終日、シヨンバーグ・センターを後にした。

おわりに

2006年2月のNY出張から、脱稿しようとする現在ですでに半年以上が経ち、短期大学部『浦和論叢』最終号が発行される頃には1年目を迎えることになる。従来出張において、この様な形で報告することはあり得なかったことだが、短期大学部が発行する最後となるであろう本紀要への筆者最後の(22本目の)投稿論文として、今回のような内容になったことを改めて断りつつ、図書・紀要委員会をはじめとする関係諸氏に再度感謝の気持ちを表したいと思う。

装いを新たにする本学紀要に、次回からどのような内容の論文を投稿することになるのか、筆者自身決めかねている。「はじめに」で言及したように、筆者の研究の「実験」ができる場となることを願って止まない。今回のNY出張が筆者自身の次の仕事への物理的、精神的に貴重な一段階となったことだけは確実である。

註

- 1) 拙著『スクリーンで旅するアメリカ』(メタ・ブレーン、1998年初版、2002年重版) 213頁。
- 2) 逃亡奴隷からお金で自由を買いボストンで自由黒人となったダグラスは南北戦争

が始まると、黒人部隊の結成を呼びかけてマサチューセッツ第54部隊を結成させた。この実話に基づく映画が『グローリー』(Glory: 1989)である。この映画に關しては拙著『旅』でも『投影』でも言及したが、拙稿20番で執筆した契機は同監督作品『ラスト・サムライ』公開であった。

- 3) 今回同様「大統領の日」を挟む時期の訪問で、ワシントンへは国会図書館を利用できるように金曜日に日帰りをした。この旅の経験は『旅』最終章「戦争というキーワードで首都をめぐる」(201-208頁)とコラム「大統領の日」(214頁)に結実した。当時クリントン政権での硫黄島50周年式典を目にした硫黄島記念碑を訪問できたことは収穫だった。あれから11年が過ぎて、硫黄島での戦いを日米二通りの視点から描いたクリント・イーストウッド監督によるハリウッド映画『父親たちの星条旗』『硫黄島からの手紙』が公開された。
- 4) 『『自由の街』奴隷が築いた：NYで史実を展示』『朝日新聞』2005年10月29日。
- 5) 劇場で出会った人々に「なぜ蜂なのか」を聞いてみたが、誰一人として知る人はなく「疑問に思ったこともなかった、ずっとこう呼んできたから」と異口同音に答えた。本学教員のホワイト氏にも確かめたが、同様の解答であった。ただ、彼は故郷で開催された大会では常に優勝してきた、とのことだったので、英語コミュニケーション科でも復活させて(ジェイコブソン氏在任中は彼が中心となって行った学年もあったが毎年というわけではなかった)2006年度前期に開催して、学生達に好評であった。
- 6) 「英単語のスペル 正確さを競う大会：全米熱中 社会現象に」『朝日新聞』2005年7月7日朝刊8頁。
- 7) 前掲新聞記事では「会場から4人」となっていたが、筆者が観た回は2人が客席から上がって、俳優と合わせて合計8名で競われた。素人がなかなかの芸達者で感心してしまった。2人とも子供の頃に大会荒らしだったのではないかと、思わせるほど難関単語にも果敢に挑戦していた。
- 8) 同記事。
- 9) 拙著『スクリーンに見る黒人女性』(メタ・ブレン、1999年) 85-97頁。
- 10) Alice Walker, *The Same River Twice: Honoring the Difficult: A Meditation on Life, Spirit, Art and the Making of the Film "The Color Purple" Ten Years Later*, (New York: A Washington Square Press, 1997, c1996) 21-22, 281-287. 同書ではスピルバーグとの価値観の違いを『風と共に去りぬ』評価で明らかにしている。
- 11) オプラは拙著『スクリーンに見る黒人女性』249-250頁でコラムとして取り上げた。
- 12) 「黒人女性と暴力」という視座からDVをめぐる合衆国での実証研究を中心とした最新研究動向も踏まえた以下の拙稿で『カラーパープル』を検討対象としたので参照されたい。拙稿「黒人社会におけるドメスティック・バイオレンス：文学と

ブルースと映画を手がかりに」『立教アメリカン・スタディーズ』第28号（立教大学アメリカ研究所、2006年3月）103-126頁；初校の段階でミュージカル『カラーパブル』に関して【付記】として加えることができた幸いであった。本節の一部はこの【付記】に加筆修正した。

- 13) 拙著『投影』（メタ・プレーン、2003年）221-223頁。
- 14) ハリエット・タブマンに関しては以下の拙稿を参照されたい。拙稿「ハリエット・タブマン」猿谷要編『アメリカ史重要人物101』（新書館、1997年）；拙稿「ハリエット・タブマン——『女モーセ』と呼ばれた逃亡奴隷『地下鉄道』の指導者』共著『アメリカ・フェミニズムのパイオニアたち——植民地時代から1920年代まで』（彩流社、2001年10月）141-145頁；拙稿「北極星をめざせ！全国地下鉄道自由センター：奴隷の逃亡援助ネットワーク」北米エスニシティ研究会編『北米の小さな博物館——「知」の世界遺産』（彩流社、2006年6月）86-93頁。
- 15) フィスク・ジュビリー・シンガーズに関しては拙著『投影』88頁を参照されたい。
- 16) “Exhibition Floorplan” *The New York Amsterdam News* (The new Black view) Oct. 7, 2005-March 5, 2006, p.16.
- 17) 前掲『朝日新聞』
- 18) “Institution of Slavery in New York,” *The New York Amsterdam News*, p.11.
- 19) “It Happened in New York: Lessons from the African Burial Ground,” *Ibid.*, pp.1, 3-7.
- 20) 展示の企画主要メンバーの一人であるIra Berlinの言葉としてチラシ裏面の説明に引用されている。
- 21) 同チラシに引用されたJames Oliver Horton教授の言葉である。彼も本展示企画の重要メンバーの一人である。
- 22) Eds., Ira Berlin and Leslie M. Harris, *Slavery in New York*, (New York: The New York Press, 2005)
- 23) “Dorothy Creole,” *The New York Amsterdam News*, p.5.
- 24) “8-year-old Mary,” *The New York Amsterdam News*, p.8.
- 25) “Catherine Ferguson,” *The New York Amsterdam News*, p.9. ;
- 26) “Catherine ‘Katy’ Ferguson,” *Eminent Americans [microfilm]: com-prising brief biographies of three hundred and thirty distinguished persons*, imprinted New York: Mason Brothers, 1856, pp.406-407.
- 27) ベンジャミン・クォールズ（明石、岩本、落合訳）『アメリカ黒人の歴史』（明石書店、1994年）103-104, 131-132頁。
- 28) Harriet Jacobs, *Incident in the Life of a Slave Girl Written by Herself*, (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1987)（小林憲二編訳『ハリエット・ジェイコブズ自伝／女・奴隷制・アメリカ』明石書店、2005年）；翻訳に関する書評として

は以下の拙稿を参照されたい。岩本裕子「『ハリエット・ジェイコブズ自伝』を読む」『図書新聞』2001年5月26日4頁。

- 29) Marian Wright Edelman, "Remembering Mrs. Coretta Scott King," *The New York Christian Times*, vol.16-no.10, Feb. 12-25, 2006, p.5.
- 30) Donna Lamb, "Landmark Exhibit Slavery in New York: Well Worth Seeing," *Ibid.*, p.8.
- 31) *Ibid.*, p.17.
- 32) 拙著『アメリカ黒人女性の歴史——二〇世紀初頭にみる「ウーマニスト」への軌跡』（明石書店、1997年初版、2000年重版）195～184、230頁。
- 33) 下記のような史料集が、2007年初春、日本の出版社エディション・シナプス（Edition Synapse）から刊行予定である。"African American Feminism, 1828-1923"（『アフリカ系アメリカ人女性のフェミニズム——19世紀～20世紀初頭の文献集——』全6巻）カナダのアルバータ大学の教授（Teresa Zackodnik）が編集にあっている。筆者は、同出版社からこの史料集の宣伝パンフレットに掲載する紹介文（推薦文）を依頼され、執筆した。そのパンフレットも2007年初春の刊行と同時に日本国内で配布されることになっている。

【『浦和論叢』拙稿一覧】

1. “Black Women in American History——The Significance of the Turn of the 20th Century——”91年9月『浦和論叢』第7号
2. “LIFTING AS WE CLIMB——Goals and Activities of the NACW Club (1896-1992) ——”92年9月『浦和論叢』第9号
3. “BLACK HISTORY MONTH IN THE U.S.A.——with special reference from *EBONY* magazine ——”93年9月『浦和論叢』第11号
4. 「アメリカ黒人女性史研究の現状」94年12月『浦和論叢』第13号
5. 「アメリカ黒人映画に関する一考察（上）——映画誕生100周年によせて」95年12月『浦和論叢』第15号
6. 「アメリカ黒人映画に関する一考察（下）——映画誕生100周年によせて」96年6月『浦和論叢』第16号
7. 「ふたりのウォーカー——20世紀初頭の経済界で成功したウーマニストたち——」97年1月『浦和論叢』第17号：浦和短期大学創立10周年記念号
8. “THE 100TH ANNIVERSARY OF THE NACW CLUBS——‘Still Lifting and Climbing’ ——”98年1月『浦和論叢』第19号：福祉科創設記念号
9. 「スクリーンでよむエスニック・アメリカ（上）——宗教でよむ：ユダヤ教徒とカトリック教徒がつくったハリウッド——」99年1月『浦和論叢』第21号
10. 「スクリーンでよむエスニック・アメリカ（下）——先住民でよむ：西部劇の悪者から歴史の証人へ——」99年6月『浦和論叢』第22号
11. 「映像で考えるアメリカ黒人女性——ウーピー・ゴールドバーグという女優を中心に——」99年12月『浦和論叢』第23号
12. Book Review: Iwamoto, Hiroko, *Sukuriin ni Miru Kokujinn-Josei*, [*African American Women Through Motion Pictures*] (Tokyo: Meta Brain, 1999); From Jemima to ‘Beloved’ and beyond, 2000年7月『浦和論叢』第24号
13. 「ブロードウェイを飾る黒人女性：20世紀最後のミュージカルのヒロインたち」2001年1月『浦和論叢』第25号
14. 「20世紀転換期の黒人女性教育者に関する覚え書き（1）——アンナ・ジュリア・クーパー研究をめぐって」2001年6月『浦和論叢』第26号
15. 「20世紀転換期の黒人女性教育者に関する覚え書き（2）——ナニー・ヘレン・バロウズ研究をめぐって」2001年12月『浦和論叢』第27号
16. 「映像を通して考えるアメリカ合衆国——社会人講座を手がかりに」2002年6月『浦和論叢』第28号
17. 「映像を通して理解させる講義——浦和短期大学教育研修集会英語科報告」2002年6月『浦和論叢』第28号
18. 「ニューヨークから考えるアメリカ合衆国：マンハッタン歴史散歩」2002年12月『浦

和論叢』第29号

19. 「大統領から考えるアメリカ合衆国：ハリウッド映画を手がかりに」2003年6月『浦和論叢』第30号
20. 「エドワード・ズウィック監督作品に見るマイノリティ表現——『グローリー』から『ラスト・サムライ』まで——」2004年6月『浦和論叢』第32号
21. 「アメリカ映画から考察するアメリカ社会——アメリカ研究への新たな視座として——」2005年6月『浦和論叢』第34号

Summary

A Report from Manhattan in Black History Month (2006)
——Exhibition of “Slavery in New York”——

Hiroko Iwamoto

This is one report of visiting and reseaching at Manhattan in February (Black History Month), 2006. Two musicals, I watched on Broadway, were “The 25th Annual Putnam County: Spelling Bee” and “The Color Purple.” One of the phrases in “Spelling Bee” was “Life is ... PANDEMONIUM.” The author of *The Color Purple*, Alice Walker wrote “... the pain too is part of the love” in the pamphlet of the musical “The Color Purple.”

The exhibition of “Slavery in New York” presented by the New York Historical Society is the main theme of this paper. The front page of *New York Amsterdam News* were “It Happened in New York”, “Black New Amsterdammers” to “Rediscovering Slavery.” One of the titles of lectures is “Women Who Said ‘No’”.

The researching library of mine is the Schomburg Center. The title of exhibition there was “In Motion: The African-American Migration Experience.” The sign “In Memoriam CORETTA SCOTT KING (1927-2006)” were placed at the entrance of the exhibition room in Schomburg Center. The latest academic information on African American women’s history was as follows: *Black Women in America*, 2nd ed., 3 vols.